

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ミクス・テオドラキス作曲オディッセアス・エリティス『アクション・エスティ』（第1回）
Author(s)	土居本, 稔
Citation	プロピレア , 27 : 45 - 59
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051903
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ミキス・テオドラキス作曲
オディッセアス・エリティス
『アクション・エスティ』
(第1回)

土居本 稔

はじめに

2021年2月28日に開催された日本ギリシア語ギリシア文学会研究発表会において筆者の発表した題目「ミキス・テオドラキス作曲オディッセアス・エリティス『アクション・エスティ』— 解釈と評価のアプローチ法 —」¹の中で提示したアプローチ法の10項目のうち、以下の3項目について本稿で述べたい。これらの3項目は次号以降のプロピレア誌上で発表するその他の7項目を論ずる際の前提条件となる。

1. エリティスと『アクション・エスティ』の文学史上の評価
2. テオドラキスは作曲の際にこの長い詩のどこを選択したか
3. エリティスはテオドラキスの作曲をどう思っていたか

1. は、エリティスの経歴と主要な詩作品を概観した後、『アクション・エスティ』の文学史上の評価を紹介する。
2. は、『アクション・エスティ』の原詩と総譜（フルスコア）の歌詞との比較を行ない、その違いを確かめる。
3. は、詩と音楽についてエリティスが詩人の立場から論じた『アクション・エスティ』に関する評論文を引用し考察する。

¹ 発表要旨はプロピレア第27号のp.98を参照。

1. エリティスと『アクシオン・エスティ』の文学史上の評価

茂木政敏著「オディッセアス・エリティスとその作品」¹を参照しながら、その経歴と主要な詩作品を概観する。

オディッセアス・エリティスは、1911年11月2日にクレタ島イラクリオンで生まれた。1930年にアテネ大学法学部に入学。1935年にギリシアに初めてシュルレアリスムを導入する詩人アンドレアス・エンピリコス、のちにノーベル文学賞を受賞する詩人ヨルゴス・セフェリス、評論家のG・カツィンバリス、A・カランドニスらともこの時期に知り合っている。

彼らは新たな文学を興すべく『新・文芸』という文芸誌を1935年に創刊したが、この雑誌の十一月号の巻頭にエリティスの代表作「エーゲ海」が掲載された。これを機に順次作品を発表し1939年に第一詩集『定位』、ドイツ占領下の1943年に第二詩集『原始 太陽』を発表した。

このあいだ、徴兵のため1939年にアテネ大学を中退し1940年12月にアルバニア戦線に出征した。1941年出征中に重篤な腸チフスに罹患して前線から離れアテネに移送された。アルバニア戦線での経験をもとに戦争を扱った長詩『アルバニア戦線に斃れた少尉に捧げる挽歌』を1945年に発表した。

しかし、1947年以降エリティスは詩作の発表を1959年の『アクシオン・エスティ』の発表まで一切やめてしまう。

ギリシアでは第二次世界大戦終結後、左右両派の内戦が勃発し、エリティスは1948年から1951年までパリに滞在した。パリではソルボンヌ大学で文献学の講座を受講し、エリュアール、サルトル、カミュ、ピカソ、ミロ、マティスといった様々な芸術家と親交を結んで大きな影響を受けた。1949年10月にギリシア内戦は左翼を封じ込めることで終結した。エリティスは帰国後、放送局や国立劇場に勤めながら評論活動、演劇、芸術分野で活躍した。

『アクシオン・エスティ』が1959年に発表され、絶賛を持って迎えられた。この作品に対し1960年に新設された第一回ギリシア国民文学賞が授与された。テオドラキスがこの詩に作曲し、1964年に公演されて多くの国民のあいだで人気を博した。1960年に連作詩集『空のための六つと一つの悔恨』を公刊した後、再び沈黙期に入る。

1967年4月に右翼の軍事独裁政権が樹立され、1974年に崩壊するまでの期間、文化面でも抑圧が激しく、テオドラキスやリッツォスなどの芸術家が逮捕、軟禁や亡命を強いられた。エリティスは、1969年に再びパリに逃れて詩作を

続け、後期の二大長詩『マリア・ネフェリ』と『小さい船員』を着想し、『光の樹と十四番目の美』を構成する大半の作品、傑作「パレオロゴスの死と復活」や「ヴィラ・ナターシャ」をパリで書いている。

ギリシアに帰国した 1971 年以降の 25 年間に（刊行された「パレオロゴスの死と復活」や「ヴィラ・ナターシャ」は、のちに『異母兄弟』に所収されるので数えないとして）、十一冊の詩集を出版する。量的に見ても、71 年以前が全詩作の 1/3、これ以後が 2/3 である。

主要な詩作品を挙げると、71 年に『モノグラム』、『支配者太陽』、『光の樹と十四番目の美』、翌 72 年に『エロスの R』、74 年に『異母兄弟』、78 年に『マリア・ネフェリ』、80 年代に入り、『便宜国の旗をつけた三つの詩』(82 年)、『見えない春の日記』(84 年)、『小さい船員』(85 年)、90 年代に『オクソペトラの悲歌』(91 年)、『悲しみの西』(95 年)、そして没後刊行された『近きより』となる。

多年にわたる詩作の後、1996 年 3 月 18 日にアテネで脳卒中のため死去した。

1979 年にエリティスはノーベル文学賞を受賞した。ノーベル賞財団の Website [Odysseus Elytis - Facts \(nobelprize.org\)](http://Odysseus Elytis - Facts (nobelprize.org)) 上で、受賞理由、および彼の詩作品について、次のように紹介されている。

受賞理由：「ギリシアの伝統的背景に対抗して現代人の自由と創造性への関心を強靱な美的感覚と知的に明確な視点で描写する彼の詩業に対して」。

作品：「オディッセアス・エリティスの詩において、伝統的なギリシア文学がシュルレアリスムの影響に満たされている。初期の作品は太陽が中心的な役割を果たしている。彼の詩は、エリティスの祖国の光、トルコブルーの海、岩の風景、古代遺跡を褒め称える。第二次世界大戦中のエリティスの経験は、彼の詩世界の中に暗い要素をもたらした。彼の最も優れた作品のひとつは『アクション・エスティ』(1959)（価値あり）であり、この中で詩と散文が古いビザンチンの典礼におけるように混ざり合っている」。

現代ギリシア詩の翻訳者でもある作家の池澤夏樹は、「エリティスの詩法は海と太陽に代表される自然をひとつのゆるぎない秩序の体系と見、それと人との接点を遠景でとらえて透明な抒情に転化するもので、ギリシア人の精神に決定的呪縛的な力をもつエーゲ海の本質をきわめて正確に表出したものといえる」とその特質を語っている。²

近現代ギリシア文学史家のロドリック・ビートンは、「典礼の慣例に従うことがそのタイトルで明確に宣言された詩である『アクシオン・エスティ』において、エリティスはキリストの受難に置き換えれば戦争、敗北、占領という国家的体験に直面する。キリストの復活のこの詩における相当句は、詩人が歓喜して詩句に名付けてそれらを『価値あり』と宣言し、最終的に善い世界を創り上げるような詩的言語の勝利である」と述べている。³

-
- 1 茂木政敏、「オディッセアス・エリティスとその作品」、『オディッセアス・エリティス詩集』東千尋 編訳、土曜美術社出版、2015年、pp.317-334
 - 2 池澤夏樹、「特集・今日の海外文学 10 オディッセアス・エリティス詩選」、文芸雑誌『海』1980年2月号、中央公論社、p.326
 - 3 Roderick Beaton, *An Introduction to Modern Greek Literature*, Oxford University Press Inc., New York, 1994, p.212

2. テオドラキスの作曲における詩文の選択

テオドラキスの総譜¹（フルスコア）に記載された曲目と原詩²の各詩節を比較しながら、テオドラキスが原詩のどこに作曲したかを明らかにしたい。

『アクシオン・エスティ』という詩のタイトルは *To Άξιον Εστί*（直訳すれば「価値あり」、「誠に値す」）であるが、これはイエスの母、聖処女マリアを賛美する詩句冒頭の言葉であると同時に、その言葉を名前にした聖山アトスに現存する有名な聖処女マリアのアイコンを指す³。適切な日本語訳はないが本稿では「価値あり」としておく。

テオドラキスはこの詩をオラトリオとして作曲した。オラトリオは聖譚曲と訳され主に聖書に題材をとり声楽と管弦楽で構成する宗教音楽を意味する。

1 Mikis Theodorakis, *Mikis Theodorakis, AXION ESTI ORATORIO for BARITONE(CHANTER), LYRIC BARITONE (POPULAR SINGER), NARRATOR, POPULAR ORCHESTRA, CHOIR AND SYMPHONY ORCHESTRA, POETRY: ODYSSEUS ELYTIS, FULL SCORE*, Romanos Productions Ltd, Limassol, Cyprus, 1996

2 原詩は Οδυσσέας Ελύτης, *ΤΟ ΑΞΙΟΝ ΕΣΤΙ Δέκατη όγδοση έκδοση*, Ίκαρος Εκδοτική Εταιρία, Αθήνα, 1999. 全 88 ページ。本稿で引用した詩文のページ数と行数はこれに従った。

3 オデュッセアス・エリティス『詩集アクシオン・エスティ 讀えられよ』山川偉也訳、人文書院、2006年、pp.175-176。

1) 総譜上の曲目：

総譜上の曲目は次の通り。受難曲中の曲目名は各詩節の出だし部分の詩句である。CD のジャケットにこれらの曲目名が記載されている。

I. Η ΓΕΝΕΣΙΣ 創世記

II. ΤΑ ΤΑΘΗ 受難曲

- α. ΙΔΟΥ ΕΓΩ ΛΟΙΠΟΝ 詩篇一
- β. Η ΠΟΡΕΙΑ ΠΡΟΣ ΤΟ ΜΕΤΩΠΟ 第一の朗読
- γ. ΕΝΑ ΤΟ ΧΕΛΙΔΟΝΙ 頌歌四
- δ. ΤΑ ΘΕΜΕΛΙΑ ΜΟΥ ΣΤΑ ΒΟΥΝΑ 詩篇五
- ε. ΜΕ ΤΟ ΛΥΧΝΟ ΤΟΥ ΑΣΤΡΟΥ 頌歌五
- ζ. Η ΜΕΓΑΛΗ ΕΞΟΔΟΣ 第三の朗読
- η. ΤΗΣ ΔΙΚΑΙΟΣΥΝΗΣ ΗΛΙΕ ΝΟΗΤΕ 頌歌六
- θ. ΝΑΟΙ ΣΤΟ ΣΧΗΜΑ ΤΟΥ ΟΥΡΑΝΟΥ 器楽演奏
- ι. ΤΗΣ ΑΓΑΠΗΣ ΑΙΜΑΤΑ 頌歌十
- κ. ΝΑΟΙ ΣΤΟ ΣΧΗΜΑ ΤΟΥ ΟΥΡΑΝΟΥ 詩篇十四
- λ. ΠΡΟΦΗΤΙΚΟΝ 第六の朗読
- μ. ΑΝΟΙΓΩ ΤΟ ΣΤΟΜΑ ΜΟΥ 頌歌十二
- ν. ΣΕ ΧΩΡΑ ΜΑΚΡΙΝΗ 詩篇十七

III. ΤΟ ΑΕΙΟΝ ΕΣΤΙ 価値あり

原詩の第3部は、ΤΟ ΔΟΞΑΣΤΙΚΟΝである。テオドラキスが作曲の際に ΤΟ ΑΕΙΟΝ ΕΣΤΙ に改題した。ΤΟ ΔΟΞΑΣΤΙΚΟΝ は、「讃歌」、「賛美」の意味。本稿では、原詩の ΤΟ ΔΟΞΑΣΤΙΚΟΝ を「讃歌」と訳しておく。

2) 原詩の詩節：

次項の原詩のうち*印のついた詩節に作曲したが、詩節名の日本語訳は、「第3部 讃歌」以外は、山川偉也訳による。（「第3部 讃歌」の山川訳は「第3部 讃えられよ」である。）

第1部 創世記*

第2部 受難曲

詩篇一*	詩篇十
詩篇二	頌歌七
頌歌一	第四の朗読
第一の朗読*	頌歌八
頌歌二	詩篇十一
詩篇三	詩篇十二
詩篇四	詩篇十三
頌歌三	詩篇十四*
第二の朗読	頌歌九
頌歌四*	第五の朗読
詩篇五*	頌歌十*
詩篇六	詩篇十五
詩篇七	詩篇十六
詩篇八	頌歌十一
頌歌五*	第六の朗読*
第三の朗読*	頌歌十二*
頌歌六*	詩篇十七*
詩篇九（右上に続く）	詩篇十八

第3部 讃歌*

3) 原詩の選択された詩文

『アクション・エスティ』原詩からテオドラキスが作曲のため選択した詩文は以下の通りである。

第1部 創世記：

一部抜粋。第1部の全12ページ、合計382行の内、第16ページの第9行目から同ページの最後の行まで計28行（約1ページ）が引用され曲が付けられた。

第2部 受難曲：

詩篇 計 18 その内、作曲 4

頌歌 計 12 その内、作曲 5

朗読 計 6 その内、3個所を引用したが朗読のみで作曲はなかった。

作曲された詩篇、頌歌、朗読は先に示した通りであるが、原詩の詩句すべてに対して作曲したわけではなく、ここでも取捨選択が行なわれた。

一例をあげれば、ΤΗΣ ΔΙΚΑΙΟΣΥΝΗΣ ΗΛΙΕ ΝΟΗΤΕ の頌歌六は下記の原詩の下線部だけに曲が付けられた。

ΤΗΣ ΔΙΚΑΙΟΣΥΝΗΣ ήλιε νοητέ και μυρσίνη συ δοξαστική
μη παρακαλώ σας μη λησμονάτε τη χώρα μου !

Αετόμορφα έχει τα ψηλά βουνά στα ηφαίστεια κλήματα σειρά
και τα σπίτια πιο λευκά στον γλαυκού το γειτόνεμα !

Της Ασίας αν αγγίζει απο τη μια της Ευρώπης λίγο αν ακουμπά
στον αιθέρα στέκει νά και στη θάλασσα μόνη της !

Και δεν είναι μήτε ξένου λογισμος και δικού της μήτε αγάπη μια
μόνο πένθος αχ παντού και το φώς ανελέητο !

Τα πικρά μου χέρια με τον Κεραυνό τα γυρίζω πίσω απ' τον Καιρό
τους παλιούς μου φίλους καλώ με φοβέρες και μ' αίματα !

Μά'χουν όλα τα αίματα ξαντιμεθεί κι οι φοβέρες αχ λατομηθεί
και στον έναν ο άλλος μπαί νουν εναντίον οι άνεμοι !

Της Δικαιοσύνης ήλιε νοητέ και μυρσίνη συ δοξαστική
μη παρακαλώ σας μη λησμονάτε τη χώρα μου !

第3部 讃歌：

一部抜粋。作曲のため選択された引用の分量が多く、原詩の以下の個所となる。第3部の全16ページ、合計292行中、計110行が選択された。

- 第73ページの第1行から同ページの第8行目まで。
- 第73ページの第17行から第74ページの15行目まで。
- 第75ページの第5行から第76ページの4行目まで。
- 第76ページの第13行から同ページの最終行まで。

- 第 77 ページのすべての行。
- 第 78 ページの第 1 行から第 4 行まで。
- 第 79 ページの第 16 行から同ページの最終行まで。
- 第 80 ページの第 5 行から第 15 行まで。
- 第 86 ページの第 16 行から第 87 ページの第 4 行まで。
- 第 87 ページの第 13 行から同ページの最終行まで。
- 第 88 ページのすべての行。

3. 詩と音楽に関するエリティスの論考

テオドラキス作曲の『アクシオン・エスティ』に関する、*Ποίηση και Μουσική*（『詩と音楽』）という題名のエリティスが著した評論文¹を下記に全文引用する。これは 1965 年に *Επιθεώρηση Τέχνης*（「芸術評論」）誌に掲載された。筆者がギリシア語原文から和訳した。

先述の通り、詩集『アクシオン・エスティ』は 1959 年に発表され、テオドラキスが 1962 年に作曲し 1964 年に初回公演が行われた。この評論文は初回公演後に書かれた。この音楽作品をエリティス自身がどのように考えていたかを記述したものである。

¹ Αστέρης Κούτουλας, *Ο Μουσικός Θεοδωράκης Κείμενα – Εργογραφία – Κριτικές (1937-1996)*, «ΝΕΑ ΣΥΝΟΡΑ» ΕΚΔΟΤΙΚΟΣ ΟΡΓΑΝΙΣΜΟΣ ΛΙΒΑΝΗ, Αθήνα, 1998, σσ.344-348.

『詩と音楽』

わたしは間違っているとは思わないが、『アクシオン・エスティ』の音楽は本来的に反発を招くという印象をもつ。つまり、詩作品を紹介して、多かれ少なかれ固有の経過をたどって、他の分野へ移行する最初の不安、導入時の戸惑いや反発、その後の穏やかな同化作用、臆病な和解、そして、最後に理解と愛がある。わたしはそれを願う。したがって、重要なことはもはやある個人の作品や、ミキス・テオドラキスの作品についてではない。われわれのどちらも完璧ではないし、また作品はもちろん愛されるため、あるいは忘れ去られるためにあるが、しかし、責任が伴うと見なされる。それがわれわれの素晴らしい国でしばしば発生しないかどうかという別の問題がある。われわれは箴言の表現、

独断的な酷評を好む。それによって、習慣から抜け出ることが妨げられる。最終的にわれわれを窮屈にさせ、その景色はわれわれを誤らせざるを得なくさせる。そして、ひどく悲しいことに『アクション・エスティ』の反対者を生み出し、多くの他の状況を悪化させる。

しかし、これは今日われわれを手一杯にさせるテーマではない。それは詩と音楽が協力して行った実験である。ギリシアにおいて「ある進んだ段階」から始まったあと義務が増大した詩、そして、述べたように一再びギリシアで、「ほとんど零歳」から始まる困難の増大した音楽と共同で行った。ところで、今日各分野で配置が完全に存在し、その遵守が原因でこの種の共同作業が強く非難される。なぜなら、詩作品の価値を正しく認めてメロディとの結合をよいものと認めないか、あるいはメロディの価値を正しく認めて、ある詩文と結びつくことが前から決まっているメロディの目的とは異なるため不適切であると判断するかのどちらかである。これらの見方を正直に早く言わなければならないし、わたしは完全にこれを理解し尊重するが、強く同意はしない。残念ながら、その原因は長いあいだの習慣に多くを帰せられる。西欧が遺言としてその習慣を残して、個別に取り扱う社会でこれらの芸術技法が理解され、個別の単位のようにそれらの結合を冒涇とみなすことに迎合してきた。ギリシアの伝統の中に閉じ込めるために古代のリラを奏でながら歌うこと、ビザンチンの讚美歌の詠唱者、そして、民衆歌のように反対する意見を主張しながら祈ることが出来るだろうが、わたしはそれを行わない。今日、同様な仮説は存在しないことを知っている。しかし、われわれの時代に特別な成果へ別の方法で導かれる新しい前提条件を創造する可能性があるといえる。社会の内部で生じる大きな変化と技巧の発見がおそらくその優位な立場をあらかじめ用意するだろう。これを妨げざるを得なくさせる習慣を放棄する勇気が必要である。それは新しい現実の中で開始時に損失さえも伴う緊張を強いる。わたしはこれを直感で語っており証明することは出来ない。最近、熱望しないにもかかわらず、わたしは新しく強固に形成された独創的な作品の中に自分自身を上げようと頭の中で考える。それは詩が演劇の場面で、書籍の分野か、あるいは音楽と歌謡の分野に立ち入ることを促す。わたしの手を動かす不明確な流れを信頼することに慣れたので、それを生み出した着想の形をアルファかベータという文字に与える。おそらく間違っているかもしれない。しかし、多分わたしたちは詩作品とは異なるひとつの概念の始まりにいるのかもしれない。ごくわずかの部分だけを除いて『アクション・エスティ』を実例として引用しない。多くの機会にわたし

はそのように言ってきたし、今日繰り返してそう言いたい。『アクション・エスティ』はそれ自体で完全な詩作品であり、その望むところはすべて言葉の中に言い尽くされている。その話し言葉は単純なメロディの中ではしばしばまったく不釣り合いである。その意義は多面的な水準において優れており、時間的余裕をもって聴きながら発展させ解釈することは困難である。周知のとおり、書き言葉と話し言葉の決まりがある。しかし、ミキス・テオドラキスのような作曲家（われわれの伝統音楽の前提を堅牢な肩を貸して持ち上げるために何と適任であるかを示した）が、立ち向かわねばならないであろう困難を完全に自覚しながら、彼の手でそれを引き受けようと申し出たとき、わたしは反発することを考えただけではなく、現実を迎え入れて彼の試みが孵化して実現できるように手助けした。

詩のより多くの個所を作曲するための申し出が当然のように行われて、初めの作曲作品が出来上がった。それがわたしに送られてきたときに、作曲家の本能が絶対的に確実であり、その歌が何と間違いのないものか分かったし、また、その歌の詩節は文学的表現を少なくして、より分かりやすく一連の思考を綴り込んでいた。間違っていなければ、「創世記」の後に詩の引用が来ている。ここではたった1ページだけの小さな個所に制限せざるを得なかった。結果として、それ自体で最も完全であり、そして最も効果的であった。

ギリシアの本質を表す個性的な特徴の正しさを立証することは、それを示したように、道徳的な世界に広げることと同様の作品のより良い始まりとはなり得なかった。さらに、もし彼に何かを示唆するように求められたなら、全体を編成する違った構造をもつ異なる作品の中にある類似性と継承の順序をできる限り維持し、そのようにして始めの構成を縮小して保持するように提案しただろう。彼はひとつの際立った構造の音楽を、まさにおのおの典型的な姿に創造しながら獲得した。最終部の「讃歌」において、作品の精神が何であれわたしの控え目な見解にほぼ近付いた。歓喜と郷愁が一緒に混ざり合ったあの感覚を与えたので、それが第三部になることをわたしは求めた。それは栄唱の独立した価値のように国土が提供するすべての特別な感覚を付与している。

しかし、ここでもうひとつ別の論点を明確にすることは正しい。わたしは、しばしば問われる。つまり、音楽により詩が「与えられる」かどうか、世間に反響を呼ぶかどうか、詩のイメージと意義を完全に世間に伝える必要があるかどうか、ということである。わたしはそれが間違いであると思う。作曲家は感じ方に彼自身の方法をもち、彼自身の個性、美的感覚と理解力により、演劇を

演出するときの演出家とまさに同じ様にそれらを探し求めて、表現する作品の中に刻み付けなければならない。これはより一層確かである。なぜなら、演出の概念は時の経過とともに音楽ほど大きく変化しないが、音楽においては、限りなく自由な立場がその変化に富むことは、個人の性格が変化に富むことと同程度に大きいという事実がある。

『アクション・エスティ』は、詩作品が「プリズム的」な独自性をもっている、すなわち多くの外面を提供する。テオドラキスは、彼自身の感性によりふさわしいようにそれを行なった。芸術家の追求できる範囲内であらゆる権利をもったように、それを拡大しさらに強調することを求めた。明後日、もう一人の作曲家が異なる目標を掲げて新しい作品を作ることをまったく排除しない。それはより上級の、より下級の、あるいはそのどちらでもないとしても、したがって、詩作品の核心をまったく変えない違う何かである。それはきっとその前提で素晴らしく魅力的である。作曲家が毎回、提案する「解釈」とその本物の音楽には価値がある。ミキス・テオドラキスが心に抱いた「民衆の聖餐式」の価値は、多くの側面からわれわれの現代音楽が獲得したものであると信じる。そうして、伝統の中に埋もれていた要素をうまく活用した。彼自身よく知っている土地でその性格をまったく変質させることなく、それを首尾よく行なった。さらに変化に富む題材に原作の形式を巧妙に当て嵌めて、それをひとつの全体にうまく溶け込ませた。そして、「作曲」の中の単純な「メロディの併置」からわれわれの民衆音楽の水準を引き上げた。さらに、歌謡と民俗楽器の単なる熱狂的ファンと同様に、より上級の価値を認める教養のある聞き手に対し、言葉を調和の取れた交わりの中でうまく保持した。そして、一詩の本文を表現しながら濃縮して厳しく反復し、一瞬でもそれを細かく引きちぎることをしなかった。

個人的には彼に感謝したい。したがって、まだ他にも恩義がある。つまり、一ひとりの別の個性の割り込みにより、作品ごとに彼の客観的な詩が提供されるあいだ、個人の本の産着と離れた私的な部屋の産着の中で育てられるまで、わたしが詩を見ることを手伝ってくれた。述べた通り、大人になった子供のようには彼はひとりでこの道を行くことができるという自覚があった。彼の通った道で、歌うことを知った何千もの人々の感覚と出会えたのは幸運な出来事である。そして、彼らが愛するものは何についても、その口の利き方はあらかじめ運命づけられていた。

(以上)

エリティスの評論文をまとめると、その要旨は以下の通りである。

1. 詩に音楽をつけることは反発を招く。これは伝統的な芸術のジャンルの硬直した受け止め方による。この習慣を放棄する勇気が必要である。
2. 原詩の省略された箇所では、テオドラキスはその詩節の文学的表現を少なくして、より分かりやすく一連の思考を綴り込んでいる。それ自体で最も完全であり効果的である。
3. 音楽により詩が「与えられる」かどうか、世間に反響を呼ぶかどうか、詩のイメージと意義を完全に世間に伝える必要があるかどうかと問いかけることは間違っている。
4. 詩作者としては、作品の中の言葉ですべてを表現しており、一方、作曲家は彼自身の感性で音楽作品を創り上げる。別の作曲家が詩の核心を変えずに異なる作品を創作することはあり得る。その作曲家の提案する「解釈」とそれにもとづく本物の音楽作品には価値がある。
5. テオドラキスは言葉を調和の取れた交わりの中うまく保持し、詩の本文を表現しながら濃縮して厳しく反復し、一瞬でもそれを細かく引きちぎることをしなかった。
6. テオドラキスの困難な仕事に感謝する。テオドラキスの音楽を受け入れた多くの人々がいたことは幸運であった。

結論として、詩集『アクシオン・エスティ』の核心部分をテオドラキスが「解釈」し、それにもとづいて作曲した作品は、エリティスによって肯定的に評価された。

テオドラキスはその核心部分をどのように「解釈」し、作曲に至ったかを分析する必要がある。すべてではないが、エリティスが指摘している以下の点が分析対象として挙げられるかも知れない。

全体を編成する違った構造をもつ異なる作品の中にある類似性と継承の順序をできる限り維持し、始めの構成を縮小して保持すること。詩集の構成、原作の形式を縮小して音楽作品の中で保持されているかどうかを検証する。

また、最終部の「讃歌」で、音楽作品の精神が何であれエリティスの控え目な見解にほぼ近付いたと述べていることについても、選択された詩文と作曲の内容に関してさらに研究する。

おわりに

エリティスの著した評論『詩と音楽』は、筆者の研究課題である言語芸術と音楽芸術の融合というテーマを考察するための有益な示唆を与えてくれる。文学研究者や評論家ではなく、詩作した本人が該当作品について自分の考えを述べている点は注目すべきであろう。

エリティス自身、詩に作曲することは反発を招くことを自ら指摘しており、その上で詩の本質（核心）と音楽家の創作への姿勢も尊重しながら、見解を述べている。テオドラキスが作曲のために選択した詩文をどう解釈して評価し作品を創り上げたかを次号で報告する。

現代ギリシアでは文学の詩に作曲した歌を *έντεχνο τραγούδι*（エンデフノ「芸術的な」歌謡）と呼んで、*ρεμπέτικο τραγούδι*（レベティカ「演歌の」歌謡）や *λαϊκό τραγούδι*（ライキ「流行歌の」歌謡）と区別している。¹ 一般大衆がごく身近に聴いて歌うことができるエンデフノ歌謡の中に芸術性を見出すことができる。

前出のピートンは、近現代文学史上において *popular art song* としてこの歌のジャンルを特記している。詩人と作曲家、詩と音楽の密接な関係性についてその役割を評価した。²

ギリシア出身のドイツの音楽史家であるゲオルギアーデスが古代ギリシア音楽の「*μουσική*（ムシケー）」という概念にある音楽と言語とのあいだの不可分な同一性の保持について述べている³。文学の詩と作曲された音楽に関して、言語と音楽の歴史的背景も考慮しながら研究を進めてゆきたい。

なお、この原稿を書き終えたときにミキス・テオドラキスの訃報が入った。長命を保っていたが2021年9月2日にアテネで死去した。96歳であった。

1 Γιώργος Σιμόπουλος, Ειρήνη Παθιάκη, Ρίτα Κανελλοπούλου, Αγλαΐα Παυλοπούλου, *Ελληνικά Α' Μέθοδος εκμάθησης της ελληνικής ως ξένης γλώσσας*, Εκδόσεις Πατάκη, Αθήνα, 2019, σσ.218-219

2 Roderick Beaton, *An Introduction to Modern Greek Literature*, Oxford University Press Inc., New York, 1994, pp.226-229

3 Thrasylbulos Georgiades, *GREEK MUSIC, VERSE AND DANCE*, Translated from the German by Erwin Benedikt and Marie Louis Martinez, Da Capo Press, New York, 1973, pp.129-142
T. G. ゲオルギアーデス、『音楽と言語』木村 敏訳、講談社学術文庫、2009年 pp.19-23

参考資料

1. Mikis Theodorakis, *Mikis Theodorakis, AXION ESTI ORATORIO for BARITONE (CHANTER), LYRIC BARITONE (POPULAR SINGER), NARRATOR, POPULAR ORCHESTRA, CHOIR AND SYMPHONY ORCHESTRA, POETRY: ODYSSEUS ELYTIS, FULL SCORE*, Romanos Productions Ltd, Limassol, Cyprus, 1996
2. Μίκης Θεοδωράκης, *Μελοποιημένη Ποίηση, ΤΟΜΟΣ Α', ΤΡΑΓΟΥΔΙΑ*, ύψιλον/ βιβλία, Αθήνα, 1997
3. Μίκης Θεοδωράκης, *Μελοποιημένη Ποίηση, ΤΟΜΟΣ Β', ΣΥΜΦΩΝΙΚΑ-ΜΕΤΑΣΥΜΦΩΝΙΚΑ-ΟΡΑΤΟΡΙΑ*, ύψιλον/βιβλία, Αθήνα, 1998
4. Μίκης Θεοδωράκης, *ΟΙ ΔΡΟΜΟΙ ΤΟΥ ΑΡΧΑΓΓΕΛΟΥ Αυτοβιογραφία 1 – 5*, ΚΕΔΡΟΣ, Αθήνα, 1986 – 1995
5. Οδυσσέας Ελύτης, *ΤΟ ΑΞΙΟΝ ΕΣΤΙ Δέκατη όγδοη έκδοση*, Ίκαρος Εκδοτική Εταιρία, Αθήνα, 1999
6. Odysseus Elytis, *The Axion Esti*, Translated and Annotated by Edmund Keeley and George Savidis, University of Pittsburgh Press, Pittsburgh, PA, 3rd Printing 1980
7. George Giannaris, *Mikis Theodorakis Music and Social Change*, George Allen & Unwin Ltd, London, 1973
8. Gail Holst, *Theodorakis Myth & Politics in Modern Greek Music*, Adolf M. Hakkert, Amsterdam, 1980
9. Παύλος Πετρίδης, *Ο ΠΟΛΙΤΙΚΟΣ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗΣ (1940-1996)*, ΠΡΟΣΚΗΝΙΟ, Αθήνα, 1997
10. Αστέρης Κούτουλας, *Ο Μουσικός Θεοδωράκης Κείμενα – Εργογραφία – Κριτικές (1937-1996)*, «ΝΕΑ ΣΥΝΟΡΑ» ΕΚΔΟΤΙΚΟΣ ΟΡΓΑΝΙΣΜΟΣ ΛΙΒΑΝΗ, Αθήνα, 1998
11. Guy Wagner, *ΜΙΚΗΣ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗΣ Μια ζωή για την Ελλάδα ΒΙΟΓΡΑΦΙΑ*, Εκδόσεις τυπωθήτω – Γιώργος Δαρδάνος, Αθήνα, 2002
12. Angelique Mouyis, *Mikis Theodorakis Finding Greece in his music*, Kerkyra Publications, Athens, 2010
13. Roderick Beaton, *An Introduction to Modern Greek Literature*, Oxford University Press Inc., New York, 1994

14. 池澤夏樹、「特集・今日の海外文学 10 オディッセアス・エリティス詩選」
文芸雑誌『海』 1980年2月号、中央公論社
15. 中井久夫訳『現代ギリシヤ詩選』みすず書房、1985年
16. オデュッセアス・エリティス『詩集アクシオン・エステイ 讃えられよ』
山川偉也訳、人文書院、2006年
17. 茂木政敏、「オディッセアス・エリティスとその作品」、
『オディッセアス・エリティス詩集』東千尋 編訳、土曜美術社出版、
2015年
18. Igor Stravinsky, *Poetics of Music, in the form of six lessons*, Preface by George Seferis, Translated by Arthur Knodel and Ingolf Dahl, Sixteenth printing, 2003, Harvard University Press, Cambridge MS
19. イーゴリ・ストラヴィンスキー、『音楽の詩学』笠羽 映子訳、未来社、
2018年
20. Thrasybulos Georgiades, *GREEK MUSIC, VERSE AND DANCE*, Translated from the German by Erwin Benedikt and Marie Louis Martinez, Da Capo Press, New York, 1973
21. T. G. ゲオルギアードス、『音楽と言語』木村 敏訳、講談社学術文庫、
2009年
22. 小泉 文夫、『音楽の根源にあるもの』平凡社ライブラリー、1994年
23. Γιώργος Σιμόπουλος, Ειρήνη Παθιάκη, Ρίτα Κανελλοπούλου,
Αγλαΐα Παυλοπούλου, *Ελληνικά Α΄ Μέθοδος εκμάθησης της ελληνικής ως ξένης γλώσσας*, Εκδόσεις Πατάκη, Αθήνα, 2019
24. CD
ΜΙΚΗ ΘΕΟΔΩΡΑΚΗ ΟΔΥΣΣΕΑ ΕΛΥΤΗ ΤΟ ΑΞΙΟΝ ΕΣΤΙ
1988 MINOS MATSAS & SON Co. LTD., MCD 735 736 ΑΕΠΠ
(ヨルゴス・ダラーラス他が歌った1988年の公演を録音)
25. ノーベル賞財団 Website
Odysseus Elytis - Facts (nobelprize.org) (最終閲覧 2021年8月)
26. YouTube 動画
歌手はグリゴリス・ビシイコーツィス他、1977年公演：
❖ TO ΑΞΙΟΝ ΕΣΤΙ - 1977 - YouTube (最終閲覧 2021年8月)